

ブックレビュー

生みの母も育ての母も母親は父親である

— 杉浦郁子ほか編『パートナーシップ・生活と制度 [結婚、事実婚、同性婚]』(2007) —

Mothers, be They Real Mothers or Foster Mothers, are FathersSugiura, Ikuko. et al. (eds.) *Partnership: Life and Institution [Marriage, Unregistered Marriage, and Same-Sex Marriage]*

東京大学グローバル COE プログラム「死生学の展開と組織化」特任研究員 柳原 良江

親役割のジェンダー化

まずはヘテロセクシュアルなカップルが子を産み育てる場合を考えてみよう。

一般的に妊娠、出産、その後の授乳まで、生みの女親は身体機能に基づいて固有の親役割を担い、その女親は「母親」と呼ばれている。一方で男性は、性交渉を除くと生物学的役割を持たず、また生物学的な役割も、他者に認識できるものではないけれど、母親と親密な関係を持ちつつ子を育てることで、生物学的な親役割も包括して「父親」と呼ばれることになる。これら母親・父親の区別は、「親」の身体的な性別に従って割り振られるカテゴリーであるが、逆に親の役割は、必ずしも全てが身体機能に基づくわけではない。それでは、身体に基づかない親役割を、ヘテロカップルはどのように分担しているのだろうか。

そこにはいぜん身体差も影響してくる。たとえばもはや身体機能を使わずとも、自らの身体で育て産み乳を与えた経験が、女性の母親役割に大きく関係するのは、容易に推察できることである。これらの経験は、女親を子の健康や成長により敏感にしたり、子どもの食への関心を高める影響をもたらしているだろう。そして女親が子の授乳をする間、社会・経済的な活動は、より男親の役割になるだろう。けれども子が離乳し、母親と生物学的なつながりを必要としなくなっても、やはり男親と女親は、それぞれ固有の役割を担い続けるべきなのだろうか。一般的にみられる父親・母親の役割分担には、やはり社会的に構築されたジェンダーが介在しているのではないだろうか。

ところで母親役割に内包されるジェンダーをセックスと区別することは困難な作業である。そもそも母親の経験が生み出す性質が〈母親＝女性〉の認識を通じて、女性のジェンダー全体に通底する規範として用いられているからだ。例を挙げると、母親に強く表れる子への自己犠牲的な愛情は、母に限らずすべての女性に、自己犠牲をいとわず他者に奉仕し弱者をケアする存在としてのジェンダー役割を付与する根拠となっている。さらに困難としているのは、一般的に親役割の分担が、すでに非対称なジェンダーに色分けされた男女の関係性の中で行われる経緯にある。そこでいわばジェンダー構造は積分されたのであり、そこから元のジェンダーを取り出して、親役割にのみ限定的に見られるジェンダー構造を抽出するのは、決して単純な作業ではないであろう。そのためか親役割は、今まで様々な領域で行われたジェンダー解体からも免れ、古典的なジェンダー役割、ジェンダー規範の生き続ける領域ともなっている。

ところが近年になり、親役割に内在するジェンダーに捉われず親業をこなす人々が増え

ている。子育てをする同性カップルの人々だ。

ジェンダー流動的な両親

同性カップルが子を持つまでには、自然妊娠や人工授精、養子縁組を行うなど、人により様々な形態が取られるが、どの子育てにも共通するのは、その家庭が二人の同性の両親によって構成されることだ。今の日本の場合、大抵はレズビアンによる、二人の女性の子育ての形をとる。

その両親はともに母親である。カップルの一方がトランスジェンダーである場合をのぞき、彼女たちは自らを「父親」と考えることはない。それぞれが自分を母親と捉えながら、子育てに必要な親役割を果たしていく。概して同性カップルの生活では、家事や経済活動に固定したジェンダー役割を用いることはなく、個人の適性に合わせた分担を行うが、それを親となっても引き継いでいるのだ。彼女たちは子供に対し、母親の役割はもちろん、父親の役割ともされる、厳しいしつけや、屋外での遊び相手、家族のリーダーとしての役割も分担する。二人の間で父親役割のうちより自らに合うものを選択しながら、必要な親業を互いにこなしていく。彼女たちは女性の体をもつことにより常に母親と呼ばれ、自らも母親と認識しているが、その実は父親にもなっているのだ。こうした子育ての姿からは、母親・父親の区別が、身体的な機能を除けば、必ずしも必要ではないことが見えてくる。ヘテロの子育てと同様に、重要なのは子を責任持って育てる「二人の親」がいることなのだ。

その一方、母親役割をこなす二人の女性の姿から、生みの母親が固有の役割を持っているのも明確に見えてくる。たとえば子が乳幼児の場合、二人の母親が同等に子育てをしているのにもかかわらず、子どもが生みの母親により愛着を覚えることがある。こうして彼女たちの姿からは、父母のジェンダーが流動化しようとも変更不能な、生んだ女性特有の母親役割の存在を見いだすことも可能となる。

ジェンダーからヘテロな文脈を取り出す

同性カップルの子育て研究は、今までヘテロの文脈に依存するがゆえ不可視であったジェンダー構造の解明に、新たな切り口をもたらす可能性を持つ。近年では日本でも彼女たちの子育てやライフスタイルに関する研究が少しずつ増加し、これからなされる理論的展開の萌芽が見え始めている。その一つとして昨年出版された、彼女たちの生活に関する数少ない日本語の書が挙げられよう。杉浦郁子・野宮亜紀・大江千束編による『パートナーシップ・生活と制度 [結婚、事実婚、同性婚]』（緑風書房、2007年）である。

本書は同性カップルを中心に、事実婚も含め多様なパートナー関係に対する制度的な問題に答える実用書の体裁を取る。それは同性カップルの研究に初めて触れる読者にとって、現状把握の助けとなるであろうし、各トピックには、それぞれ理論面での概説もなされているため、特に本領域に馴染みのない人にとっては格好の入門書となるであろう。さらに注釈には専門的な文献も記載されており、より理論を深めたい読者にも、今後の研究に大きな手がかりを提供してくれる。

日本ではまだ語られる機会の少ないトピックだが、本書はその現状を捉えると同時に、理論の概要を学ぶことも可能とする、貴重な文献の一つといえよう。